

# 上原 美術館 通信

No.  
**17**

編集・発行 公益財団法人上原美術館  
2022年4月18日発行(季刊年4回発行)  
公益財団法人 上原美術館  
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341  
Tel. 0558-28-1228  
[www.uehara-museum.or.jp](http://www.uehara-museum.or.jp)



今回の主役は古写経と絵巻物の断簡。主役の片方の古写経とは、奈良時代から室町時代に書写されたお経のことで。

古写経の多くは紙に墨で書いたもの。奈良時代の古写経を天平写経と呼びますが、天平写経の代表作の一つ、《賢愚経断簡》(大聖武、本展出展)の文字は千二百年を超える年月を経てきたとは思えないほど力強く黒々としています。平安時代前期に書写された《金光明最勝王経注釈断簡》(飯室切、本展出展)も千年を超える年月を経てきたもの。荒々しくすら見える力強い筆致は天平写経とはまた異なった個性を見せませんが、やはり黒々とした墨の色が印象的です。さらに、墨書は濃淡やにじみ、筆勢の強弱、線の太さなどで趣が変わり、色彩のように千変万化します。「墨は五彩をあらわす」という言葉がありますが、古写経の「墨色=すみいろ」の世界は奥深く味わい深いものです。

古写経の中には美しい料紙を用いたり、金字銀字で経文を書写したり、経巻の扉や表紙などに美しい絵を描くものもあります。本展出展の《紫紙金字華嚴経断簡》は聖武天皇が東大寺大仏に奉納した華嚴経の断簡と考えられる古写経。希少な植物であるムラサキの根から採取した染料を用い、紫色に染め上げた料紙に金泥で経文を書写した天平写経の傑作です。続く平安時代には藍で染めた紺紙を用いた写経が行われました。《紺紙金銀交書阿毘達磨俱舍論卷二六》は平安後期の東北に一大勢力を築いた奥州藤原氏の祖、藤原清衡の命により、永久五年(1117)2月頃から天治三年(1126)3月頃まで九年もの歳月をかけて制作された約5400巻からなる一切経の一卷。本経は濃紺に染めた料紙に金字銀字を交互に用いて経文を書写、さらに扉に金泥銀泥で釈尊(お釈迦さま)が説法する場面を描いた美しい古写経です。このように紫紙や紺紙を用いた古写経の金銀の一字一字は、濃色の背景のなかで光を受けて輝き、夜空の星々を見上げるようです。

当館ではこの春、新たに《金銀野毛散観普賢菩薩行法経断簡》(図1)を収蔵しました。平安時代は法華経信仰が盛り上がった時代で、八巻からなる法華経に、プロローグ(序章)とエピローグ(終章)に当たるとされた無量義経(開経)と観普賢菩薩行法経(結経)を添えた十巻一組の経典が多く制作されました。新収蔵の本経は、このうちの結経の一部。金箔銀箔を細く糸のように切った野毛や切箔、金銀の粉末である砂子をまんべんなく散らした料紙に繊細で優美な経文を書写した断簡で、平安時代後期に多く制作された装飾経の中にあっても白眉といえる美麗な作品です。



図1 《金銀野毛散観普賢菩薩行法経断簡》平安時代 新収蔵・初公開



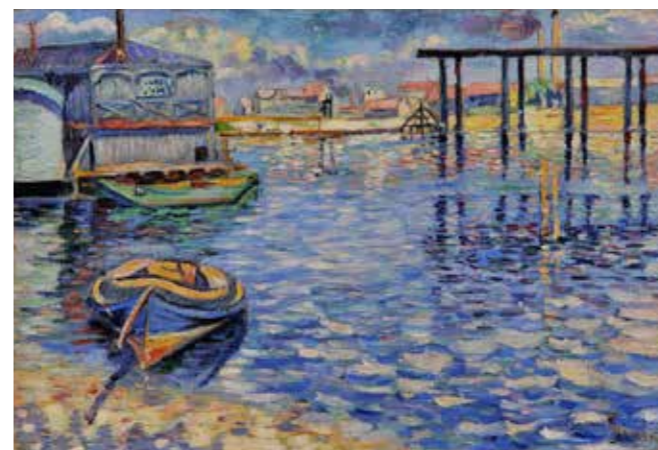
図2 《高野大師行状絵巻断簡》鎌倉～南北朝時代 新収蔵・初公開

仏教のお経(経典)は釈尊のことばとされ、仏教徒にとって特別なものでした。お経には仏の特別な力が宿り、魔や災厄から私たちを救ってくれると信じられたのです。また仏教には、仏の悟り(真理)そのものこそが仏の本体、本質であるとする考え方もあり、真理を解き明かすお経の語句、一文字一文字はそれ自体が仏そのものでもありました。そこで仏教徒はお経を書写するにあたって心を込め、特別な紙を用い、あるいは金や銀の文字で飾ったのです。

また当館ではこの春、弘法大師(空海)の生涯を描いた《高野大師行状絵巻断簡》(図2)も収蔵いたしました。この絵巻が本展のもう一つの主役です。高野大師とは弘法大師(空海)のこと。唐で密教を学んだ弘法大師は、帰国に際して膨大な文物を日本に持ち帰りましたが、これらの品々はその後の日本文化の発展に大きな影響を与えました。当館がこの度収蔵した断簡には、空海が唐で収集、遣唐使船に積み込んだ多くの文物を、船から陸地に積み下ろす場面が描かれています。空海が持ち帰った文物の多くはほかならぬ経典や書物でした。日本に経典がもたらされる現場を描いた美しい絵画と金銀墨色に彩られた珠玉のような古写経の数々をあわせてご覧ください。(田島)

遠くの人やものを繋ぐ船は、古くから人々の生活のそばにありました。そして、画家たちは様々な思いとともに船を描きます。

新印象主義の画家シニャックは生涯30隻以上の船を所有し、海の風景を数多く描きました。シニャックは16歳のときに父を亡くし、パリからセーヌ川の対岸アニエールに母とともに移り住みます。そこで間もなく小さなカヌーを手に入れ、また絵を描き始めました。《アニエール、洗濯船》はシニャック18歳の作品、画家自身の手記に第一号と記されています。タイトルにある洗濯船は画面左上の建物です。洗濯機のなかった当時、人々は川に浮かべた船の上で洗濯をしていました。画面右には石炭用クレーンの橋脚が立ち、対岸のクリシーの工場からは煙突が立ち上り、19世紀のパリの活気が伺えます。一艘だけこちら側を向く小舟は輝くみなもに揺られ、大海に漕ぎ出す自らの未来を暗示するかのようです。その後、シニャックは盟友スーラと出会い、点描を用いた新印象主義で画壇に新風を吹き込みます。しかし、スーラが31歳で夭折すると、シニャックは間もなく失意のうちに自らのヨット「オランピア」で大海へと漕ぎ出しました。そして南仏サン＝トロペに安住の地を見出し、マティスやボナールなど多くの画家がそこを訪れ、新しい芸術が生まれます。こうしてシニャックの船は自らの芸術ばかりではなく、近代絵画そのものの航図を広げていきました。



ポール・シニャック《アニエール、洗濯船》1882年

旅の画家マルケもまたセーヌ川などで多くの船を描きま。第一次世界大戦の時期には南仏マルセイユの港にあるホテルに滞在し、窓から見える風景を描きました。マルケ

にとって船が大きな意味を持つようになるのは1920年のことです。マルケはマルセイユから初めて地中海を渡り、北アフリカのアルジェを旅します。そこで案内役を務める女性マルセルと出会いました。彼女は次のように回想します。「ひとりの友人が私に、旅行中のある芸術家に私の国を案内してほしいと言ってきた。そこで私たちは小さな細い道を黙って散歩した。私たちは度々微笑し合い、幾度もたたずんだ」。そして、二人は3年後に結婚し、この地はマルケにとって第二の故郷となります。その後も度々地中海を渡ったマルケは、船そのものが後半生をあらわす重要な乗りものとなりました。陽光のもとで影がみなもに揺らめく《曳き舟》は、マルケが初めてアルジェを旅したときに描かれた作品です。遠くには大型船が数多く停泊し、地中海の玄関港として賑わっていた様子が垣間見えます。この作品の近くには、将来の伴侶となるマルセルがいたのかもしれない。



アルベール・マルケ《曳き舟》1920年

また、上原美術館のある伊豆・下田も船にゆかりの深い土地です。古来良港として栄えた下田港は、幕末にペリーが来航し近代の夜明けがはじまりました。1954(昭和29)年に下田を訪れた須田国太郎は港の向こうに並ぶなまこ壁の家々を印象的にとらえ、船が行き交う町の風情をとらえています。本展では新収蔵となる須田国太郎《下田港》を初公開します(P.5コラム参照)。

そのほか、モネやシスレー、牛島憲之らによる船の絵画をご紹介します。様々な画家たちが描き出す船の旅情をお楽しみいただけましたら幸いです。(土森)



《高野大師行状絵巻断簡》(部分)  
鎌倉～南北朝時代

薄い青が残る波間に、欄干や帆柱が赤く塗られた一隻の船が停泊しています。錨をおろした船には波が少し打ち寄せ、船体が上下に揺れているようです。船内にはたくさんの荷物が積み、船近くに寄せた小舟へと、船人が大事そうに荷物を渡しています。小舟はこれから着岸して荷降ろしをするのでしょうか、大きな船には鳥居や緑色の魚の飾りも見られます。

本図は平安時代前期、中国へ渡り、密教を日本へと持ち帰った弘法大師(高野大師)、空海の生涯を描いた長い絵巻の一部分です。この部分は空海が中国から帰国してきた様子を描く「著岸上表事」という場面です。残念ながら、空海の姿は本図には見られませんが、積載した船荷は、空海が中国から持ち帰ったたくさんの経典や道具類なのでしょう。こうした情景から空海の姿は見えなくても、まさに今帰国してきたということが伝わってきます。

当館では4月29日より開催のコレクション名品選で、新収蔵した《高野大師行状絵巻断簡》を初公開いたします。

す。弘法大師、空海の生涯を描いた行状絵巻は数種知られていますが、本図はそのうちの本来、十巻で一揃いとなるもの。八巻の残巻として伝わりましたが、昭和初期には一巻～五巻までが三大寺喜兵衛氏の所蔵となり、重要美術品に指定されていました。その後、絵巻は散逸し、現在は一巻が逸翁美術館、二巻が西新井大師・総持寺、三巻は個人所蔵となり、四巻～五巻が切断されて大半は所在不明ですが、一部はサンフランシスコ・アジア美術館などへ分蔵されています。当館の所蔵部分は四巻の冒頭の一部にあたります。

本図はむかって右側に絵の情景を説明する詞書、そのあとに船の絵が描かれた部分が続いています。詞書には「平城天皇御宇大同元年十月に大師帰朝し給／御年三十三なり則請来の経論道具以下／目錄一巻の書にするして大宰大監高階真人遠成につけて表をたてまつり奏聞し給へり／西府逗留の程は観音寺にすませ給ふ翌年／京洛に入給ふとみえたり其時符牒云／□□□世音寺三綱」(／は改行。□は判読不能の文字)と書かれています。これによると平

城天皇の御代、大同元(806)年の十月、三十三歳の空海が帰国し、請来した経典や道具を目錄一巻に記したとされています。またこの目錄を九州、大宰府の役人である高階真人遠成へ渡し、京に入るまでの間、空海は観世音寺に住んだとしています。詞書の最後は欠字となり、読むことが出来ません。空海が京へすぐに入らなかったのは、本来、留学生として20年間是中国で勉強をしなければならぬ留学期間を、2年で帰国してきたため、朝廷は大同4(809)年まで京都に入ることを許可しなかったと伝えています。その間は詞書に書かれているように九州の観世音寺に滞在していたようです。

制作が鎌倉～南北朝時代にさかのぼる本図は今なお、色彩を画面にとどめ、当初の絵巻のすがたを想像させます。細やかな波の描写、船人の表情などにぜひ注目していただきたい作品です。往時の日本と海外との交流が垣間見える貴重な一場面を、幕末に海外との窓口となった下田の地でお楽しみいただければと思います。

伊豆と船の縁は古く、古代に遡ります。日本書紀には応仁天皇が「伊豆国に科せて、船を造らしむ。長さ十条。(中略)便ち軽く泛びて疾く行くこと馳るが如し。故、其の船を名けて枯野と曰ふ」と記されています。また、万葉集には「伊豆手船」という言葉も出てきます。

伊豆・下田の港が特に賑わいを見せるのは江戸時代からです。当時の帆船は風向きに頼っていたため、下田は江戸へ出入りする船の風待港となります。1636(寛永13)年には船改番所が置かれ、江戸へ出入りする船は必ず下田港でその調べを受けるようになり、多いときには年間3,000艘も出入りしたといいます(『図説 下田市史』1988年)。1721(享保6)年に番所が浦賀に移されるとその数は減りますが、再び脚を浴びるのは1854(嘉永7)年に締結された日米和親条約により下田が開港し、アメリカ合衆国のペリー艦隊が来航したときでした。その際、吉田松陰が小舟を使って下田湾の弁天島から黒船ポータハン号への密航を企てますが、失敗に終わります。1898(明治31)年、江戸時代より下田で造船を営む澤村家により下田船渠合資会社が設立され、近代的な造船業が始まります。船舶の大型化や関東大震災の影響により下田の造船業は活況を帯び、その勢いは昭和50年頃まで続きました。

京都に住んでいた須田国太郎が下田を訪れたのは、造船と観光が盛んであった1954(昭和29)年のことでした。6月6日の日記には「東上 三島に五時頃つく 伊豆風景をかくために招かれたため」と記されています。翌日は葦山で江川邸や反射炉を見学し長岡温泉へ、8日にバスで天城を越えて下

田に向かいます。同日には下田の「市中あるく」、「なまこ壁眼につく ここがかくつもりにする」とあり、すぐに描く場所が決まったようです。翌日は「了善寺(筆者註:了仙寺)」を訪れ、「対岸へ写生へ 雨ふり出す 宿を出て蓮台寺へ」とあります。10日朝には下田で写生の続きを行い、午後には南伊豆の石廊崎や小稲を訪れています。11日午前に再び下田へ、午後には小稲へ行き、帰りに妻良へ出て「八号一枚かく」とあり、かなり手早く油彩画を仕上げていることがわかります。12日にはバスで松崎へ行き、西伊豆の田子、安良里、宇久須を経て三島に帰り、翌日東京へ向かい「月光荘へ 下田風景渡す」とあります。早々に油彩画を額装に出したのかもしれませんが。

上原美術館では、この度、縁あって油彩画の《下田港》を新たに収蔵しました。これまで2枚のスケッチ《下田》と《なまこ壁の家》を所蔵していた当館にとって、この油彩画の収蔵は長年の悲願でもありました。本作とスケッチの《下田》は同じ風景です(そのほか

同構図の水彩画《下田風景》[1954年、所在不明]も残されています)。この風景の場所は確定できていませんが、おそらく旧・下田船渠の事務所近く、現在のペリー来航記念碑の周辺から北西を向いて描いているようです。奥の山は大安寺の後ろにある乳峰山、スケッチの画面左上に見えるのはドックのクレーンと考えられます。「61」という数字や、海上にある構造物のモチーフはまだ分かっていません。家並みにはなまこ壁も見られ、昭和30年前後の造船と観光で賑わっていた下田の雰囲気伝える作品です。

この油彩画の完成は下田来訪の3年後、1957(昭和32)年とされています。同年の日記を紐解くと、1月27日に「朝山路君来訪 下田港渡す」と書かれています。須田がどのような経緯で下田に来訪し、この絵を描いたか、今後も引き続き調査をしていきたいと思えます。作品が描かれた場所や須田の足取りなど当時の状況をご存知の方がいらっしゃいましたらご教示いただければ幸いです。



須田国太郎《下田港》1957(昭和32)年 油彩・カンヴァス 新収蔵・初公開



須田国太郎《下田》1956(昭和31)年 コンテ・紙



須田国太郎《なまこ壁の家》1954(昭和29)年 鉛筆・紙

授業入館

- 静岡大学 2021年12月25日
- 下田市立下田東中学校 2022年3月7日
- 下田市立大賀茂小学校 2022年3月10日

下田東中学校は奈良・京都方面の修学旅行の事前学習で学芸員が仏像の見分け方をお話しました。大賀茂小学校は、修学旅行の代替で来館し、学芸員が生徒に問いかけをしながら展示作品の紹介を行いました。

出張授業

- 静岡県立稲取高校・西伊豆町立西伊豆中学校 2022年2月4日

当館の学芸員が各学校で出張授業を行いました。稲取高校では土屋学芸員が1年生に日本の美術が西洋に受け入れられた様子を、2年生にゴッホの作品について授業を行いました。西伊豆中学校は田島主任学芸員が、京都・奈良方面の修学旅行の事前学習として、仏像の見分け方をお話しました。

調査

- 伊豆の国市寺院調査 2022年2月17日
- 三島市内寺院調査 2022年3月23日

伊豆の国市寺院調査は伊豆の国市教育委員会からの依頼で、田島主任学芸員が現地で見学を行いました。今後、改めて詳細な調査等を検討していく予定です。三島市内寺院調査は、調査先寺院、地区の方々、みしまのお寺めぐりの会協力のもと調査を行いました。

教室作品展

- 仏像彫刻教室 2022年3月1日～3月5日
- 写経教室 2022年3月8日～3月12日
- 日本画教室 2022年3月23日～3月27日
- デッサン・水彩画教室 2022年3月31日～4月4日

当館で開催している実技講座4教室の受講生作品展をアトリエ棟で開催しました。1年間の成果を発表する展示会で、受講生の力作が並びました。

シンポジウム

日本の美術館とナビ派—地方美術館から考える研究の可能性— 2021年12月13日  
一橋大学大学院言語社会研究科小泉雅也教授が主催するオンライン・シンポジウム『日本の美術館とナビ派—地方美術館から考える研究の可能性—』に当館学芸員が参加しました。はじめに小泉教授、広島県立美術館森万由子氏、静岡県立美術館貴家映子氏、当館土森智典学芸員が発表、コメンテーターの国立西洋美術館の袴田紘代氏も参加して全体討議を行った後、20名を超える参加者とともにブレイクアウトセッションを行いました。地方美術館同士の研究の連携を図る場となるばかりでなく、美術史研究を志す学生や研究者、学芸員が交流する貴重な機会となりました。シンポジウムの傍聴記は一橋大学大学院言語社会研究科のウェブサイトで紹介されております。

<https://gensha.hit-u.ac.jp/news/detail/event-20211213report.html>



授業入館(静岡大学)



授業入館(下田東中学校)



授業入館(大賀茂小学校)



出張授業(稲取高校)



彫刻作品展



写経作品展

伊豆さんぽ

稲梓

上原美術館は伊豆急下田駅から稲生沢川を遡ること約10km、山あいの稲梓地区にあります。美しい里山の風景を見ていると、ここでいつから人々が生活を始めたのだろうという素朴な疑問が湧いてきます。バス停「相玉」から美術館への道中にある稲梓小学校近くからは、縄文時代中後期の土器片が見つっています。美術館近くの畑から黒曜石が見つかったという話もあり、この辺りには縄文時代から人々の生活があったことが分かります。

「稲梓」の文字が初めて登場するのは奈良時代のこと。平城京跡から出土した天平7(735)年10月の木簡には「稲梓郷稲梓里戸主占部□志戸口占部石麻呂」が荒堅魚(なまり節や塩鯉の原型)を貢進したことが記されています。「下田」という地名が登場するのは14世紀頃のことですから、「稲梓」はそれよりも600年も古いこととなります。山あいの河岸段丘が広がる稲梓地区は、稲作に適した土地として古来より生活しやすかったのかもしれませんが、また、木簡に記された「占部」姓はもともと占いととも航海術にも秀でた一族と言われ、この地に先進的な技術があったことが伺えます。奈良時代の木簡を見ると、伊豆各地から朝廷に堅魚やその煎汁を税として納めており、伊豆は古来より海上交易が盛んだったことが分かります。



上原美術館に隣接する向陽寺の達磨大師から見た稲梓地区の風景

伊豆国は天武天皇9(680)年に駿河国から別れて鴨評、売羅評(現在の妻良に関係すると言われていす)の二つの地域から始まり、奈良時代には賀茂、那

賀(現在の松崎町に地名が残ります)、田方の3郡となりました。先述の奈良時代の木簡を見ると、賀茂郡は稲梓郷以外に、「賀茂」、「築間」、「色日」、「川津」の郷が記されており、現在の南伊豆町・賀茂、竹麻(月間)、石廊、河津町にあたりと考えられます。平安時代、承平間に編纂された『和名類聚抄』では、賀茂郡は「賀茂」、「月間」、「川津」、「三島」(伊豆七島)、「大社」の郷名があり、かつての稲梓郷の地域が大社郷となったようです。

この大社郷は伊豆の主神とされる三嶋神に由来します。三嶋神とその后神、伊古奈比咩命は噴火を繰り返す伊豆諸島の神として三宅島に祀られていました。その二神は奈良時代に下田市白浜の地に遷され、その社の所在からこの一帯が大社郷と呼ばれるようになったと言われます(三嶋神が現在の三嶋大社の地に遷るのは歴史的に11世紀頃とされています)。9世紀頃に造像された河津町南禅寺の薬師如来を中心とした仏像群は、伊豆諸島で繰り返される噴火を鎮めるためのものと考えられ、その関連性も浮かび上がります(三嶋神の本地仏は薬師如来とされています)。10世紀の『延喜式神名帳』を紐解くと、伊豆三嶋神社は東海地方で最も重要な大社とされており、稲梓や河津が当時の宗教的な先端の地であったことが分かります。そのように見ると、美術館に寄託されている稲梓地区宇土金・向陽寺の阿弥陀如来像(10世紀)が関東で最も古い定印を結ぶ阿弥陀如来坐像の一つであること、稲梓地区・北の沢の法雲寺に9世紀の如意輪観音像があることなど、伊豆南部に平安時代前期の仏像が多く残る理由の一端が垣間見えます。

バス停から美術館まで徒歩で約15分。古代の神や仏の気配を感じながらこの田園を眺めると、いつもの道がまた違った風景に見えてくるかもしれません。(土森)

参考文献:『下田市史 資料編—考古・古代・中世』2010年  
原秀三郎「三嶋大社の歴史と宝物」『図録 三嶋大社宝物館』1998年



今年の冬は温暖な下田でも寒く感じられ、美術館のラウンジから望む天城山では雪も降りました。雪が降った後に天城トンネルを通ると、天城湯ヶ島方面は一面の雪景色でした。下田ではほとんど雪が降らないので、少しびっくりしました。伊豆は暖かなイメージがあるのですが、天城トンネルを境に天候がかなり違うことが多いようです。本号が発行される頃には、伊豆も暖かくなって山々には山桜が咲いていると思います。

美術館の庭も梅の花に始まり、だんだんと春を感じられるようになりました。のどやかな春のひとつきを美術館でお楽しみいただければ幸いです。  
(櫻井)



### 大展示室展

2022年4月2日(土)～5月15日(日) 静岡県立美術館

静岡県立美術館では、2021年9月6日から2022年4月2日までの約半年間、設備改修工事が行われました。その内容はエントランスホールの天井改修に伴う照明のLED化、展示室壁面の改修、照明器具の更新などです。詳細は静岡県立美術館ニュース『アマリリス』第144号のレポートに紹介されておりますので(同館ウェブサイトでも公開中)、ぜひご覧ください。

そして、改修工事後の第1弾展覧会が『大展示室展』。美術館なのに作品が展示されないという画期的な展覧会です。可動展示壁やLEDスポットライト、展示ケースなど、普段は作品の影に隠れて展示を支えている展示室の秘密が紹介されています。いつもレイアウトが違う展示室の壁はどうなっているの？照明でどのように見え方が違うの？といった普段気になり続けていた疑問がこの展覧会で解けるかもしれません。

また、静岡県立美術館では「再始動」に合わせて、4月1日からデジタルアーカイブがパワーアップします。収蔵品の検索システムが一新されるほか、ロダン《地獄の門》のVR画像や池大雅《蘭亭曲水・龍山勝会図屏風》の超高精細画像、現代作家へのインタビュー動画が公開されるほか、木下直之館長の書下ろしエッセイが毎月2本ずつアップされる予定です。この春、「再始動」する静岡県立美術館から目が離せません。

(土森)



### 当館収蔵品の出品予定

#### 没後50年 鏑木清方展

東京会場 2022年3月18日(金)～5月8日(日) 東京国立近代美術館

京都会場 2022年5月27日(金)～7月10日(日) 京都国立近代美術館

当館からの出品作品：鏑木清方《十一月の雨》、《築地川》